

七 覺醒の鞭か御慈悲の鞭か

次は柳生又十郎の劔道修行話を紹介する。此の又十郎は若氣の過から、遂に父但馬守から勘當を蒙った。何か一つ功を立てねば歸參を許されない。柳生家は元來、徳川將軍の劔道指南の家柄だから、又十郎も劔道の達人になつて歸參したいと思ひ、遙々二荒山に登つて、伴藏先生の許を訪ね、今までありし一伍一什を悉く懺悔した。「何卒して私も貴翁に就いて劔道を學び心を練り直して、勘氣の赦されるやうに致したいと思ひます。就いて入門を願ひ度う存じますが、擊劔と云ふものは、何年程かゝつたら出來ませうか」と尋ねると、伴藏先生も初めは軽く相手になつて云はれる「サウサ、何事でも生涯の仕事だ」。生涯の仕事と仰しやつては、取付く島もありませぬが、本氣になつて修業致しましたら、何年位で出來ませうか。「さうぢや、まあ十年位かな」。左様で御座いますか。私も年老つた親を控て居りますので、早く歸參して不孝の罪を詫たいと思ふから、若し一生懸命になつて修業致したら、云何なもので御座いませう。「サウサ、一生懸命にやるならば、二三十年は掛らう」。段々長くなつて來た。「併し先生、精神一到何事か成らざらんと云ふこともあります。其の通り晝夜の別なくやつたら、如何なもので御座いませう」。「サウサナ、まあ其の位にやれば、六七十年も掛らうわい」。功を急ぐ者は却て後れる。走る足は躓き易く、近道は屹度迷ふ。又十郎も成功を急いで、段々年頃が長くなつた。

そこに氣付いた又十郎は、恭しく態度を改めて「承知致しました、それでは今日から、貴翁を師範と仰いで、如何なる仰せにも従ひますから、何卒弟子にして下さいませ」と言つたら、伴藏先生始めて入門を許した。「併し弟子にする以上は、今日只今から擊劔のげの字も口にするとは相成らぬ、木

刀一つ振り廻すことも相成らぬ」と堅く言ひ渡された。擊劔を學びたいと云ふ者に、擊劔のげの字も云はざる處、聊か功名を鼻にかけさゝぬ處に、先生の萬斛の慈悲がある。是を會得せねばなりません。又十郎は毎日薪を拾ひ、飯を焚き、水を汲んで下僕の務めをして居る。三月経つても、半歳たつても一年になつても、木劔一つ持つ術を習ふことも出来ない。劔道に就いて一言半句の教もない。恚うなると誰でも退屈する。こそく逃げ仕度をする。辛抱が出来なくなる。又十郎も心中不安に思つて、或日掾端に出て茫然と考に耽つて居た。すると先生ひよつこり背後から出て来て、「此の馬鹿野郎」とばかり、ぴつしやり一本打たれた。又十郎驚いた。間拔面を見てニヤリ奥に引込まれた。斯様な鹽梅で、飯炊く時でも、掃除する時でも、少し隙があればポカリ一本「此の馬鹿野郎、殺されて仕舞ふぞ」とやられる。又十郎寸分の油斷が出来ぬ。

私共は何時も、この無形の木刀で打たれて居るが氣付かない。愛別離苦生死無常の只中に、外界の誘惑のみか、内心の怨賊に打たるゝばかりなることを、痛切に感受し、轉じて御慈悲の鞭なるを領せねばならぬ。伴藏先生の不意撃ちに、又十郎も段々精神が練れて來た。或時は先生の一撃に、ひらりと身をかはし、「如何で御座る」と云ふ處をポカリ一本。残念でたまらない。尙進んで、或日飯を炊かうと思つて、火吹竹を把つて、頻に竈の下を吹いて居ると、「此の馬鹿野郎」聲に應じて下る一撃。持った火吹竹でハツと受け止めた。その任運無作の處を認められた先生、茲に初めて劔道の極意を授けられ、其の後歸參が叶つて跡目相續をしたと、云ふことであります。

全身を如來の大悲に打ち込め。ハツと受け止めた處、其處には先生の心術のまゝが徹底して居るのである。須らくこの機微に觸れねばならぬ。「唯除五

逆誹謗正法」の大なる呵責は、微塵に分れて、近く日常生活に顯れ、親より兄弟より、夫より、妻子より、社會の人々より、いつも親しく降り注がれてある。私共は常に謙虚の心に返りて、この最も力をこめ給ふ御慈悲の鞭を頂かねばならぬ。打ちこむ鞭が御慈悲なら、受けた心も御慈悲である。この御慈悲を受込むが肝要。